

読むことを書くことに生かす指導

「文章の特徴を捉えてリライトに生かそう」

二年 P 42 「クマゼミ増加の原因を探る」



滋賀大学教育学部
附属中学校
いのうえつじ
井上哲志

はじめに

説明的文章の指導にあたっては、筆者の述べ
進め方を手本にしながら作文するという学習活
動のゴールを設定することに取り組んでいる。学
習指導要領の「読むこと」と「書くこと」の指
導事項を見比べると、共通することも多く、生
徒が読むことで得た知識を書くことに生かすこ
とで、互いを高め合うことができるのではないか
と考えるからだ。

本教材は、仮説を立て、それを検証する形で
本論が述べ進められている。他にも、小見出し
が付けられたり、図やグラフがふんだんに使われ
たりするなど、目を引く特徴が多く、また、完
成度が高いので、生徒が書く活動に取り組み際
の手本となり得る。そこで、文章を読み、学ん
だことを生かして、話題や内容が似ているものの、
異なる趣旨で書かれた文章をリライトする活動

を課したいと考えた。リライトする文章として
は、「フシダカバチの秘密」(アンリ・ファール作・
吉田晴男訳、光村図書『国語1』昭和62年度版)
を用いた。

指導計画(全七時間)

■学習目標

- ・ 情報と情報との関係のさまざまな表し方を理
解し使う。
- ・ 観点を明確にして文章を比較するなどし、文章
の構成や論理の展開、表現の効果について考え
る。

■展開

- 第一次 文章の内容を理解する(五時間)**
- 第一時** 学習の見通しを持つ・本文の概略を捉える。
- 第二時** 「フシダカバチの秘密」を読み、「クマゼミ増加の原因を探る」を比較する。
- 第三時** 「クマゼミ増加の原因を探る」の工夫や

原因を、「地球温暖化」と一言で片付けてしまい
がちな自分たちの姿を、確認しておかなければ
ならないと考えたからだ。

▼**第二時** まず、「クマゼミ増加の原因を探る」
と「フシダカバチの秘密」の、二つの文章を読み
比べて、相手意識と目的意識の違いが、構成や
叙述にどう影響しているのかを読み取らせた。同
時に、生徒には中学校二年生を相手とし、フシ
ダカバチの「秘密」を論理的に説明するという
目的でリライトすることを確認した。

▼**第三時～第四時** 第二時で確認したように、
「秘密」を論理的に説明するという目的をもつて
リライトするなら、「クマゼミ増加の原因を探る」
から、筆者の述べ進め方の工夫のうち、何を役
立てられそうか、意見交流をしながら「前提」「小
見出し」「仮説(と検証)」に絞った。そのうえで、
それぞれの部分を書くときに役立つ「手引き」(も
しくは「ひな形」)を作る目的で、該当部分を分
析的に読んだ。

「前提」は「前提を示した理由」を考えさせ、
交流すること迫った。この場合、実際には検証
の結果、否定され、本文にも書かれなかった、た
くさんの「仮説」があったであろうことを想像さ
せながら、「前提」には、事実に基づく合理的な

判断の結果、仮説が立てられていることを読者
に示す働きがあることを確認する。

生徒の作ったひな形

○△という事実は、△△と考えられるため、□□
について調べるとよい。

「小見出し」を抜いた本文を配布し、「その段
落の中心となる話題を示す名詞で終わる」とい
う条件で書かせた。しかし、リライトの「手引き」
を作成するために大事なものは、正しく小見出し
を付けることではなく、小見出しと文章全体の
関係を捉えさせることにある。この場合は、小見
出しは全て、筆者の考える「クマゼミ増加の原因」
であることを捉えた。

生徒の作った手引き

・ 中心となる話題に関連付けて付ける。
・ 名詞で終わるとよい。

▼**第五時** まず、本文の「仮説1」と「仮説2」
に注目し、共通点を探らせた。学級で共有した
いことは、実験結果(事実)と考察(意見)で
構成されていることである。次に、「仮説1」と
「仮説2」の考察部分の相違点を探らせた。相違
点をふまえて、接続語に注目しながら「ひな形」
を作り、学級で交流した。

生徒の作ったひな形

特徴に注目し、リライトの「手引き」
や「ひな形」を作る目的で本文を読む。

- 第二次 文章をリライトする(二時間)**
- 第六時** 「前提」「仮説1」「仮説2」の項目を立て、
「フシダカバチの秘密」をもとに、リラ
イトする。
- 第七時** 友達の作品との相違点に注目し、そ
の意図を確認し合う。

指導の工夫・学習の実際

▼**第一時** 「自覚的な学び」のために、仮説・検
証型の文章を書くときに、今までの国語の学習
で役立ったことや、困ったことを振り返り、交流
させた。また、「困ったこと」をもとに、本単元
における学習テーマを各自に立てさせた。

本文を読む前には、滋賀県においてもクマゼミ
が増加している原因を予想させた。本文の主張
を自分事として捉えるためには、クマゼミ増加の

「仮説1」 Aの結果はBである。つまり、Cだと
言える。

「仮説2」 AについてBと言えるが、ただ、Cを
考えるとDとは言えない

▼**第六～七時** 「前提」は、本文から引用して
使えそうなところ、「仮説」は、自分で立ててみ
たものを、それぞれ交流させるなど、生徒のつま
ずきを予想しながら全体指導に取り組んだ。リ
ライト活動に取り組み始めてからの個別指導は、
手引きと本文を再確認させるように言葉がけを
した。作品の交流では、根拠の過不足や、事例
をどのくらい詳細に書くかなどについて、本文に
立ち返って確認する姿が見られた。

おわりに

本校では、総合的な学習の時間に「BIWAKO
[TIME]」という、課題探究学習に取り組んでいる。
異年齢集団によるグループ学習だが、生徒は個
人の学びをレポートにまとめる。リライトの教材
として、卒業生の書いたレポートを使うなどと
し、より、学びが実際の生活場面に密着したも
のになるだろうと思われる。今後は、生徒が必
要性を感じながら学習に取り組めるような教材
の開発に取り組んでいきたい。